

令和8年度
愛媛県議会議員派遣（イタリア）
結 果 報 告 書

令和8年6月16日（火）～21日（日）

イタリア共和国 リミニ市

目 次

1. はじめに	1
2. 派遣目的	2
3. 派遣期間	3
4. 議員団の構成	4
5. 派遣結果報告	5
6. おわりに	14

1. はじめに

今回の議員派遣は、イタリア共和国リミニ市で6月16日から19日まで開催されたVelo-city 2026 Riminiに中村知事や松尾議長らと共に出席し、各種式典や会議に参加するほか、閉会式では次期開催地として旗を引き継ぎ、本県での会議参加を呼び掛けるとともに、Velo-city 2027 Ehimeの成功に向けた知見を得るために行ったものである。

Velo-cityは1980年にドイツ・ブレーメンで始まった歴史ある国際会議で、ECF（European Cyclists' Federation：欧州自転車連盟）が主催し、約60か国から1,400人以上が参加し、行政、研究者、企業、観光関係者、自転車団体など多様な人材が集まる国際会議である。

ECF主催という事で欧州での開催が多いが、2016年には台湾の台北で開催されており、来年の本県開催はアジアで2回目、日本で初めてとなる。

背景には本県独自の「自転車新文化」の取り組みや、サイクリストの聖地として世界からも注目を集める「しまなみ海道」が高く評価されていると肌で感じた。

同会議は世界最大級の自転車政策・まちづくりに関する国際会議で、自転車を活用した持続可能な都市づくりをテーマに開催されるが、分科会等の「学術会議」だけでなく、「展示会」と「バイクパレード」の三本柱で構成された国際会議であり、一般的な学術会議とは異なる要素を持っている。

さらに、日本初開催ということもあり、開催地である本県はノウハウも無い中で試行錯誤の連続となるだろうが、これまで培ってきた「自転車新文化」の一つの集大成としても同会議を成功させるため、議会も行政と一体となって機運醸成に努めたい。

本報告書は、今回の視察を通じて得られた知見や意見交換の内容を取りまとめるとともに、それらを来年開催されるVelo-city 2027 Ehimeの成功に向けた施策へとつなげるための示唆を整理したものである。

現地での視察や関係者との交流を通じて、議員一人ひとりが得た貴重な経験と実践的な知見が、本県開催の円滑な運営とさらなる充実に寄与し、本報告書がその一助として広く活用されることを期待する。

愛媛県議会議員派遣（イタリア）議員 川本 健太

2. 派遣目的

現地で開催される「Velo-city 2026 Rimini」に参加するほか、開催地議員との意見交換や愛媛開催周知PR等を実施し、次期開催地として、行政と議会が一体となり開催への意気込みと歓迎の意向を示すとともに、2027 年愛媛開催の成功に向けた機運醸成を図ること。

3. 派遣期間

令和8年6月16日（火）～令和8年6月21日（日）までの6日間

【日 程】

	月日	地名	時刻	スケジュール
1	6/16 (火)	松山空港	16：35	松山空港 発
		羽田空港	18：20	羽田空港 着
		羽田空港	21：40	羽田空港 発
				(機内泊)
2	6/17 (水)	フランクフルト空港	5：20	フランクフルト空港 着
		フランクフルト空港	8：20	フランクフルト空港 発
		ボローニャ空港	9：50	ボローニャ空港 着
		リミニ市	13：00	Velo-city2026Rimini 会場 視察
			19：00	バイクパレード 参加
				(リミニ市泊)
3	6/18 (木)	リミニ市	9：00	Velo-city2026Rimini 全体会議 視察
			11：30	リミニ市内自転車走行環境 視察
			14：30	Velo-city2026Rimini 分科会 視察
			19：30	ネットワーキングディナーパーティー 参加
				(リミニ市泊)
4	6/19 (金)	リミニ市	10：30	リミニ市副市長等との意見交換
			12：00	Velo-city2026Rimini 全体会議 視察
			13：00	Velo-city2026Rimini 閉会式 視察
		ボローニャ市		(ボローニャ市へ移動)
				(ボローニャ市泊)
5	6/20 (土)	ボローニャ空港	15：10	ボローニャ空港 発
		フランクフルト空港	16：45	フランクフルト空港 着
		フランクフルト空港	20：45	フランクフルト空港 発
				(機内泊)
6	6/21 (日)	羽田空港	16：50	羽田空港 着
		羽田空港	19：40	羽田空港 発
		松山空港	21：10	松山空港 着

4. 派遣議員の構成

次のとおり、全5名の議員を派遣した。

【派遣議員名簿】

	氏名	期数	会派	備考
1	越智 忍	9	愛媛維新の会	
2	川本 健太	3	自由民主党	
3	菅 森実	2	リベラル愛媛	
4	乗松 幸子	1	公明党	
5	村上 信太郎	1	自由民主党	

5. 派遣結果報告

(1) Velo-city 会場・全体会議・分科会 視察

[6/17 (水) ~19 (金)]

【文責：菅 森実】

Velo-city 2026 Rimini は、メインテーマに『Delivering the Urban Dream (都市の理想を実現する)』、サブテーマは、①Built to Inspire:Designing Beautiful Urban Environments(人々を魅了する都市へ：美しい都市環境のデザイン) ②Cycling for Life:Promoting Healthy Lifestyles (暮らしの中のサイクリング：健康的なライフスタイルの推進) ③Travel Reimagined:Advancing Sustainability & Tourism (旅の再創造：持続可能性と観光の推進) ④Good Vibes:Championing an Inclusive Transition (ポジティブな変革：包摂的な移行の推進) ⑤Multimodality:Building Integrated Transport Systems (マルチモーダル：統合型交通システムの構築) を掲げ、Palacongressi di Rimini - IEG Expo 会場で6月16日から19日まで開催された。

会場視察では、広く開放的な雰囲気の中、国単位・地域単位で分けられた、①ツーリズム ②政策 ③シェアサイクル ④駐輪場 の展示会が開かれている様子を拝見した。

入口から入ってすぐ、誰の目にも留まり注目されていた、54 m²の愛媛県と日本の合同ブースでは、連日どの時間帯も、愛媛県パンフレットやグッズに興味を持たれている参加者が足を止め、それらを手に取りながら、ブース内に展示されているNCR・シェアサイクル・駐輪場・自転車利用状況・3次計画等のパネルを見ていた。



そこでは、法被を着た愛媛県の担当者らと来場者が活発な意見交換・質問を行っていた。最終日の中村知事による愛媛県開催PRのプレゼンテーションにおいて、会場から今大会一番の大きく長い拍手が起こったことを思い返すと、大きなスクリーンに多島美としまなみ海道が映し出され、その橋の上を人々が颯爽と自転車で走行する場面が一番盛り上がっていた。これは大会会場において、担当者らが心を込めて愛媛県や日本をPRすることで、来年5月25日から日本初・愛媛県で開催されるVelo-city 2027 Ehimeへ思いを馳せていただき、より強くリアリティのあるストーリーにつながったのではないかと



感じている。

また、会場の展示ブースにおいては、自転車を通じたまちづくり・人づくりの進化・深化を感じた。夜間でも識別できるピクトグラムの研究開発が進んでいたり、省スペースで施設の出来る防犯性の高い駐輪場が紹介されていたほか、幼い子を乗せて移動できるお洒落な雰囲気で実用性の高い自転車が紹介されていたり、日本や愛媛県であまり見かけないものもあり、これらが幅広い層に好まれるのではないかと今後に向けた可能性を感じた。

特に楽しかった記憶は、展示会場にあったイタリアンジェラートを販売するオプションをつけた自転車において、実際にジェラートが配布されていたことがあげられる。美味しい食を通じ、初対面の方々と笑顔でコミュニケーションを図ることができた。

そのほか、展示会場内でも分科会が開かれており、ふと足をとめて見聞きすることができることも、色んな学びを得る機会につながると感じた。

さて、私たちは1階の部屋で、『From research to practice:Transforming Road Space (研究から実践へ：道路空間の変革)』分科会に参加した。過去のVelo-cityでは、自転車が文化として根付く欧米において、自転車施策が古くから議論されていることや、超党派のコミットメントが得られなければ、施策が進まない・中止に追い込まれる・別政党が政権を握ると逆転することも議論されてきた。今大会では、イタリアとルーマニアのECFメンバーに加え、デンマークやベルギーの各国から、地方及び地域行政の課題について議論された。



2階では分科会の他に、開会式と閉会式と全体会議も行われた。大画面のスクリーンで、人・街・自転車をしっかりと将来にわたってつなぐ議論や過去・現在・未来にわたる自転車活用議論等がなされ、自転車が文化としてしっかりと地域に根付いてきたことを学ばせていただき、これからも取り組むためには、一過性のイベントで終わることなく、また、経済効果を追うだけでなく、地元理解やサイクリングマナー向上等のしっかりとした足場固めが必要と受け止めた。これについては、日本のサイクリストの聖地の石碑がある大三島が地元である私としても、大事な点だと感じている。

これまでの中村知事のリーダーシップのもと、しまなみ海道をブランディングしてこられたつぼみが、大輪となって咲き始めたことを感じている。世界中から、自転車を通じ愛媛県へ足を運ぶ方々が、豊かな食の美味しさや景色の素晴らしさを感じ、人のあたたかさも相まって、愛媛ファン・四国ファンになることを願っている。

貴重な機会をいただいたことに、深く感謝申し上げます。

(2) バイクパレード

[6/17 (水)]

【文責：乗松 幸子】

1 バイクパレードの概要と開催意義

6月17日、Velo-city 2026 Rimini のプログラムの一つであるバイクパレードに参加した。バイクパレードは、自転車利用者の安全な道路環境や権利を求める市民運動にルーツを持つが、現在では、自転車を中心とした持続可能なまちづくりを市民が体感し、共有する祝祭的なイベントとして世界各地で開催されている。

リミニで開催されたバイクパレードでは、市内の道路を一時的に車両通行規制し、約10キロメートル、1時間のコースを参加者が自転車で走行した。参加者はシェアサイクルや自前の自転車を利用し、子どもから学生、若者、高齢者まで幅広い世代が参加しており、誰もが気軽に自転車を楽しめる機会となっていた。

2 景観とシェアサイクルを活用した魅力づくり

走行コースには、美しいビーチや観覧車、歴史ある古城など、リミニならではの魅力的な景観が広がっていた。担当者からは、ビーチ周辺の自転車道の整備には2年の年月をかけ、子どもから高齢者まで楽しめる空間づくりを目指したとの説明があった。参加者は景色を楽しみながらサイクリングを満喫することができ、観光資源と自転車利用が効果的に結び付けられていることを実感した。シェアサイクルは全て電動アシスト付き自転車であり、長距離でも快適に走行できる環境が整っていた。利用はすべてアプリで管理されており、貸出から返却、決済までスマートフォン一つで完結する。利用後は所定のエリア内であれば任意の場所で返却できる仕組みとなっており、自転車をより身近で利便性の高い移動手段として定着させる工夫がなされていた。

3 市民参加による祝祭的な雰囲気

出発地点には開始前から多くの参加者が集まっており、家族連れや友人同士のグループ、子どもを乗せたカーゴバイクで参加する親子の姿も数多く見られた。スピーカーを搭載し大音量で音楽を流す自転車もあり、その周辺では音楽に合わせて歌ったり踊ったりする姿も見られ、会場全体には祭りのような一体感が生まれていた。初対面同士でも自然に会話が生まれていたことが印象的であり、自転車を通じた交流の広がりを感じた。スタッフや警察関係者による交通整理や誘導も丁寧に行われており、安全確保が徹底されていた。沿道には多くの市民や観光客が手を振ったり写真を撮影したりしながら参加者を歓迎する姿が見られ、イベントそのものをまち

全体で楽しみ、支えている様子が見えたと感じた。

4 自転車を利用したまちづくり

また、市内の自転車専用道路には進行方向が分かりやすく表示されており、安全で快適に走行できる環境が整備されていた。道路空間や案内表示など、サイクリストへの配慮が随所に見られ、自転車を日常的な移動手段として位置付けるまちづくりが実践されていることを実感した。一方で、一部には自転車道と歩行空間の分離が十分でない区間も見られ、利用者同士が互いに譲り合いながら通行していた。インフラ整備に加え、利用者のマナーや共存意識を醸成することの重要性も感じた。



5 自転車による観光振興と地域経済への効果

さらに、リミニはビーチリゾートとして知られる観光都市であるが、従来はホテルとビーチを往復する観光行動が中心であり、人の流れが限定的であったという。

しかし、自転車道の整備やシェアサイクルの充実を進めた結果、観光客の移動範囲が広がり、市内各地への周遊が促進された。これにより観光客の分散化が図られ、商店街や歴史地区など地域全体への経済効果の向上にもつながっているとの説明を受けた。

6 視察を通じて得られた示唆と愛媛への期待

今回のバイクパレードは、一時的に自動車中心の道路空間を市民に開放し、自転車や歩行者を中心としたまちのあり方を体験する機会にもなっていた。普段は自動車が行き交う道路を、多くの市民が安心して自転車で走る光景は非常に象徴的であり、自転車を中心としたまちづくりが市民に受け入れられ、文化として根付いていることを実感した。自転車利用の促進にはインフラ整備だけでなく、市民一人ひとりが自転車の価値を共有し、まちづくりの主体として参加する意識を醸成することも重要であると感じた。



今回のバイクパレードへの参加を通じて、自転車は単なる移動手段ではなく、人と人、人とまちをつなぐ重要なツールであることを改めて実感した。愛媛県においても、しまなみ海道をはじめ世界に誇るサイクリング環境を有しているが、今後は国内外のサイクリストだけでなく、地域住民や子ども、高齢者など幅広い世代が自転

車を楽しみ、交流できる機会をさらに創出していくことが重要である。また、自転車と地域の食、文化、歴史資源を組み合わせることで、県内各地への周遊促進や地域経済への波及効果も期待できる。来年開催される「Velo-city 2027 Ehime」で、自転車の魅力を再認識するとともに、世界から訪れる参加者との交流を深め、本県のさらなる魅力発信と地域活性化につながる機会となることを期待したい。

（３）リミニ市副市長等との意見交換

【6/19（金）】

【文責：村上 信太郎】

このたび、世界最大級の自転車政策国際会議「Velo-city 2026 Rimini」の開催地であるイタリア・リミニ市を訪問する機会を得た。現地では、大会の準備・運営を中心となって担ったバレンティナ副市長をはじめ、関係議員であるロベルタ氏から、開催に至るまでの背景や都市計画上の工夫、地域社会へもたらされた成果、そして今後の展望について直接お話を伺った。



会談の冒頭、副市長らから発せられた「リミニから愛媛へバトンを渡せることを大変嬉しく思う」という言葉が強く印象に残っている。Velo-cityは単なる国際会議や大規模イベントにとどまらず、自転車という環境負荷の少ない移動手段を通じて、より良い持続可能な未来を創るという理念を世界で共有し、その熱意と知見を次の開催地へ継承していく運動そのものである。その想いを直接受け取ったことで、次期開催地となる愛媛県が果たすべき役割の大きさを改めて痛感した。

リミニ市におけるVelo-city開催までの道のりは決して平坦ではなく、開催地に選定されるまでに3度にわたる挑戦を必要とした。デンマークやドイツ、スウェーデンといった中北欧諸国では自転車利用が高度に定着している一方、イタリア国内では自転車政策がまだ発展途上にある地域も少なくない。リミニ市においても、「なぜ今、自転車を中心としたまちづくりが必要なのか」という根本的な問いに対し、市民の理解と協力を得るまでには相当な時間を要したという。特に最大の障壁となったのが、自動車利用者との合意形成であった。既存の車道空間を削り、自転車専用レーンや歩行者空間へ再配分する試みはドライバーからの反発や渋滞への懸念を生んだため、行政側は膨大な対話を重ね、安全対策の必要性和都市の将来像を粘り強く説き続ける必要があった。

また、開催に向けたインフラ整備として最大課題となったのが、同市のシンボルでもある海岸沿いのウォーターフロントエリアの再開発である。安全で快適な自転車ネットワークを構築するため、専門組織を立ち上げて長期にわたり多様な関係者

との調整を推し進めた。過酷な調整作業と整備の努力を重ねた結果、かつて自動車中心だった沿道は見事に生まれ変わり、観光客の満足度向上や地域経済の活性化という明確な成果となって結実した。目に見える変化が現れたことで、当初懐疑的だった市民の理解や支持も確実に広がっていった。副市長らが「ウォーターフロント開発の成果を世界へ発信できることが誇りだ」と語った表情には、試練を乗り越えた強い自信が滲み出ている。

現地視察の際には、当方からリミニ市の政策運用や市民意識の変化について具体的な質問を投げかけ、率直な回答をいただいた。

まず、3度の挑戦を経て開催が決まった際や長期間の工事が進む中での「市民の反応」について質問したところ、決定当初は大規模な予算投入や道路空間の減少に対する不安や不満の声が少なくなかったとの回答を得た。特に沿道の商店主からは「車が停められなくなると客足が落ちる」との懸念が寄せられたが、行政側は一方的な説得ではなく、「歩きやすく立ち寄りやすい空間に変えることが購買行動を増やす」という他都市の実証データを示しながら対話を徹底した。その結果、工事完了後に美しい景観と賑わいが生まれたことで、現在では街頭店からも非常に高い評価を得ているということであった。

次に、Velo-city の開催決定が市全体の自転車施策にどのような「変化や加速度」をもたらしたか尋ねた。「世界最高峰の国際会議を迎える」という明確な目標と期限が設定されたことで、都市計画、交通、環境、観光の各部門が一体となった専門組織が機能し、従来であれば数年要していた意思決定や予算化が劇的に加速したとの説明を受けた。さらに、シェアサイクルの拡大や駐輪インフラのスマート化など、ハード・ソフト両面での統合的な施策が一気に前進したという。

続いて、大会閉幕後を見据えた「自転車施策の展望とレガシー」について質問した際、副市長らは「イベントを成功させて終わりではない」と強調された。大会後も整備したネットワークを市内全域や隣接自治体へと延伸させ、広域的な通勤・通学・観光のサイクルラインを構築する計画であるという。彼らのゴールは単に「自転車に乗る人を増やすこと」ではなく、自転車を通じて交通事故をゼロに近づけ、CO₂を削減し、市民の健康寿命を延ばし、地域経済を年間通じて潤すことにあり、Velo-city 開催はリミニが持続可能なグリーン都市へと脱皮するための「出発点」に過ぎないという力強い見解を示された。

副市長らの説明を通じて強く感じたのは、自転車を単なる「効率的な移動手段」として捉える狭義の交通政策からの脱却の必要性である。自転車には、歩行者・自転車・自動車の動線を明確に分離して誰もが安心して移動できる交通環境を創出する「交通事故の削減」、自動車依存からの脱却を促す「環境政策（CO₂削減）」、日常的な運動習慣を定着させて健康寿命を延ばす「市民の健康増進」、そして滞在型・周遊型の観光を促進して沿道地域の消費活動を促す「観光振興と地域経済の活性化」といった多面的な価値が秘められている。副市長らからは、「安全な自転車利用環

境を世界中に広げていくことこそが私たちの使命であり、素晴らしいサイクリング環境を持つ愛媛県にも、妥協することなく挑戦を続けてほしい」という熱く力強い激励をいただいた。

今回のリミニ市視察を通じて痛感したのは、自転車政策とは交通施策の一環にとどまらず、都市計画、環境政策、健康増進、観光振興を一体的に推進する総合的なまちづくり政策そのものであるという事実である。また、同市が2度の落選にも挫けず、長期的なビジョンを掲げて粘り強く取り組み続けた姿勢からは、政策を推進する上での覚悟と継続性の重要性を深く学んだ。愛媛県には「しまなみ海道」をはじめとする世界レベルのサイクリング資産が存在するが、その強みを真の地域課題解決や持続可能なまちづくりへと昇華させるためには、インフラ整備のさらなる拡充、安全教育の徹底、そして市民一人ひとりへの理念の浸透が不可欠である。リミニ市から受け取ったバトンを胸に、愛媛県においても自転車を活用した持続可能な地域社会の実現に向け、全力を尽くして取り組んでいきたい。



(4) Velo-city 2026 Rimini クロージングイベント

[6/19 (金)]

【文責：越智 忍】

Velo-city 2026 Rimini のメイン会場において行われたクロージングイベントにおいて、次回開催地である日本、愛媛県への引継ぎセレモニーが行われた。

主にヨーロッパの都市で開催される Velo-city がアジア地区で開催されるのは、2016年に台湾・台北で開催されて以来2回目である。

愛媛県では「自転車新文化」をうたい、様々な取り組みを行ってきたが、その中でも大きな起爆剤となる Velo-city の誘致活動を積極的に繰り広げてきた。国際サイクリング大会である「しまなみサイクリング」をはじめとする様々な取り組みが、主催者である「欧州サイクリスト連盟」(以下ECF)に高く評価され、通例では複数回のエントリーを繰り返したのち権利を得ることができるものである中、初めてのエントリーにもかかわらず、開催地としての選定を勝ち得る結果となった。これまでの中村知事をはじめ、関係者の御努力に敬意を表したい。



クロージングイベントでは、今回の開催地であるリミニ市及びECF関係者の

閉会スピーチに始まり、今回の Velo-city の様子と次回開催の愛媛県をアピールする映像が放映された後、中村知事による次回開催へ向けたスピーチが行われた。



日本における自転車に対する安全や駅前や繁華街における自転車の駐輪対策を紹介するとともに、愛媛県における高校生のヘルメット着用義務化や自転車保険の加入義務化など、全国でも先んじた取組みを行っていることを紹介した。また、サイクリングは健康と生きがいと友情を与えてくれる素晴らしいものであることをアピールし、Velo-city

関係者をはじめ、世界の多くのサイクリストや自転車業界に関係する方々に愛媛大会への参加を呼び掛けた。

これに対し、会場内はこれまでの全体会議や様々な分科会でも感じたことのないほどの大変な盛り上がりや反響が感じられた。

また、大会期間中に様々な国から参加されている方々と言葉を交わす機会があり、私たちが次回開催地からの参加者とわかると、異口同音に愛媛大会への期待の言葉を述べていただいたのが印象的であった。

以上のように、Velo-city 2026 Rimini は次回大会への大きな盛り上がりとともに幕を閉じた。

さて、ここからは今回の大会に参加したことから感じた次回愛媛大会に向けて取り組むべき課題について、考察していきたい。

まずは、メイン会場である愛媛県武道館について、オリエンタルな外観から会議誘致の大きな要因になったことは推察できるが、展示スペースの確保や全体会議、各種分科会の開催場所の確保に対し、分散型の開催を含めた検討に意を用いる必要があると思われる。

次に、大会において毎回開催されるバイクパレードについて、コース設定や交通規制に関しては、これまでのマラソンなどの各種大会のノウハウから問題はないと思われるが、参加者に提供されるレンタサイクルの供給体制(今回はライムやB I Tなどのレンタサイクルシステムが参加期間中無償で提供され、どちらのシステムも位置情報を活用したどこでも乗り捨て自由なシステムであり、日本のレンタサイクルシステムではあまり見ない)の確保や愛媛県では義務化されているヘルメットの着用対策(今回のリミニ大会でもヘルメットの着用者は極めて少なかった)に意を用いる必要が感じられる。

次は大会参加費用の問題であろう。側聞すると主催者であるECFによって、全体参加の場合が 1000 ユーロ程度となっているようだが、円安為替レートの影響もあり、日本円に換算して 18 万円を超える金額になる。

身をもって感じる海外での物価(ミネラルウォーターや食事代)の高さからも推察すると、会場使用料や警備などの人件費、レンタサイクルシステムの借上げ代

などの経費は相当高額になるであろうことは容易に想像でき、日本における物価水準などを勘案し、ECFと今後協議を重ねることも必要ではなかろうか(余談であるが数年にわたってVelo-cityに参加された方の経験によると、期間中の昼食経費も参加費に含まれているが、開催経費の緊縮が余儀なくされているのか、年々食事のクオリティが低下していると感じるとのこと)。

アコモデーション(宿泊・滞在)に関して、松山は大規模な全国大会などの開催経験があることから、問題はないと思われるが、メイン会場がやや郊外であることや分散開催になった場合の移動手段についても、検討の必要性がありそうである。

また、多くの参加者の方は、日本語が堪能ではなく、英語を共通言語としていることにも注意をしたい。

最後に、今回の愛媛大会誘致の大きな要因でもある「しまなみサイクリング」についてである。クロージングイベントにおける引継ぎの場面でも、しまなみサイクリングの様子が動画で紹介されており、紹介スピーチでは【特別】に高速道路本線を閉鎖して行われるイベントであることを述べていたが、会場における雰囲気では、



【特別】の部分に注意して聞いているようにはあまり感じられなかった。つまり、多くの海外の方は愛媛大会に参加をすれば、しまなみ海道の「本線」を走ることができると思い込んでしまっているような印象を受けてしまった。もちろんVelo-city 2027 Ehimeのオプションとして、しまなみ海道のサイクリング体験を設定することは大切であるが、その場合、例えば来島海峡大橋の部分だけでも本線を開放することを想定する必要があるのではないだろうか。

いずれにせよ、これらの諸課題に取り組み、Velo-city 2027 Ehimeの成功に向けて、われわれ議員団も最大限の努力と協力をしていきたい。

6. おわりに

今回の視察に参加した議員は、私を含め全員が Velo-city への参加が初めてであったが、現地において実際に参加・視察したことにより、Velo-city の性格や運営実態について、深い理解と貴重な経験を得ることができた。

Velo-city は、一般に「国際会議」として想起される学術中心の会議とは趣を異にし、自転車利用に関する政策、産業、文化、観光及び市民交流など、多様な分野を包含した総合的な国際イベントであった。全体会議や分科会といった学術的プログラムに加え、自転車関連企業、各国の自転車団体等約 70 団体が出展する展示会、世界各国から集まった参加者と開催地域の住民が自転車を通じて交流するバイクパレード、さらには自転車関連インフラや交通改善箇所等を実際に走行しながら視察するテクニカル・ヴィジットなど、多彩なプログラムにより構成されていた。

具体的には、展示会は、企業や自治体等が最新の取組み、製品及び技術を広く発信する見本市としての機能を有しており、バイクパレードは、自転車利用の普及及びその価値を広く発信する象徴的なイベントであるとともに、市民参加型のサイクリングイベントとしての性格も併せ持つものであった。また、テクニカル・ヴィジットにおいては、実際の自転車利用環境やインフラ整備の状況を体感しながら視察することができ、開催都市のまちづくりや観光資源に直接触れる貴重な機会となっていた。さらに、立食形式で開催されたネットワークングディナーパーティーは、参加者相互の交流を促進する場として活気にあふれており、Velo-city が単なる学術会議にとどまらず、国際的な交流、情報発信及びネットワーク形成を目的とする複合的な国際イベントであることを強く認識した。

過去の開催事例については、2016 年の台湾・台北開催において、世界的な自転車メーカーである GIANT 社が主体的に運営に参画したことにより、産業振興の色彩が強い会議となった旨の説明を受けた。一方で、開催内容は開催都市の特色や方針に応じて柔軟に構成されており、ECF からも「過去の開催事例にとらわれることなく、日本独自の開催内容で差し支えない」との考え方が示されているとのことであった。

このことは、来年に開催予定の Velo-city 2027 Ehime においても、欧州開催の形式を単に踏襲するのではなく、日本、そして愛媛県ならではの特色を生かしたプログラムやおもてなしを世界に向けて発信できる大きな可能性を示すものである。しまなみ海道をはじめとする世界有数のサイクリング環境、本県が長年推進してきた「自転車新文化」の取組み、さらには豊かな自然、歴史、文化及び食といった地域資源を最大限に活用し、参加者に愛媛ならではの魅力を体感していただけの会議とすることが重要である。

その実現に当たっては、県議会と行政が一体となって準備を進めることはもとより、国土交通省、本州四国連絡高速道路株式会社をはじめとする関係機関と緊

密に連携し、道路環境の整備、テクニカル・ヴィジットの企画及び運営、国内外に向けた広報・プロモーション等、幅広い分野において協力体制を構築していく必要がある。

今回の視察を通じて得られた知見や人的ネットワークを今後の準備に十分反映させるとともに、Velo-city 2027 Ehime を成功に導くことにより、本県が推進する「自転車新文化」を一層発展させ、世界に向けた愛媛県のブランド力及び情報発信力の向上を図ることが期待される。また、インバウンド誘客の促進や地域経済の活性化にも資する実効性の高い国際会議となるよう、引き続き必要な施策及び取組みを着実に推進してまいりたい。

愛媛県議会議員派遣（イタリア）議員 川本 健太